

ベルギーはいろんな事情がありまして

経済学部教授 米田 清

準備

早期定年で会社をやめてから大学に来たので、年齢制限で在外研究はだめになりそうでした。若い先生たちが哀れんで順番を譲ってくれて、間に合いました。

行きたかったのはルヴァン・カトリック大学（UCL）です。理由はCORE（Center for Operations Research and Econometrics）という有名な研究所があること。フランス語が話せるようにもなりたいし。ヨーロッパの中心、福大の提携校、都市計画が独特、妻の母校、食べ物やビールがおいしい、などもあります。

UCLで1425年の創立当時はラテン語を使っていたことでしょう。近代からはフランス語です。町がオランダ語圏内にあっただけで摩擦が起き、1970年代に大学がオランダ語とフランス語とに分かれました。

大学のオランダ語部分はKULとして町に残り、フランス語部分UCLは南に30kmくらいのフランス語圏に新しい町を作って引越しました。もとの町がオランダ語でレーヴェン、フランス語でルヴァン。新しい町がルヴァン・ラ・ヌーヴ「新しい方のルヴァン」。古い方をルヴァン・ラ・ヴェーヴ「後家の方のルヴァン」とも。

さて、中世からの蓄積がある大学の図書を、どう分けるかが問題でした。ロンリー・プラネットという本には、辞書式に並べて前半と後半で分けた、と書いてあります。うそ、と思って後日UCLの副学長に聞いてみたら、やっぱり違うそうです。「連番の奇数と偶数で分け

た。」

在外研究の2年前の夏休みに、下見に行きました。ルヴァン・ラ・ヌーヴの中心部は歩行者用で、駐車場や駅は地下にあります。ヨーロッパの伝統的な都市観を現代の生活に合わせて設計が練られています。

ところが、行きたいUCLには知合いがありません。人文学部の先生方に教わって、あちこち手紙を出しました。無理してフランス語にしたので、大手間です。なかなか良い返事がもらえません。そうするうちにUCLにいたことのある経済学部の同僚がアメリカの先生に手紙を書いてくれ、その紹介で招聘状が出ました。

査証の手続きは福岡県警に2回、東京と大阪に1回ずつ行きました。不在中は家などを預ってもらいました。

渡航

現地で滞在許可を得るには、住居の確保が条件です。住居の契約には、いろんな書類と多額の現金が条件です。多額の現金を扱うには地元の銀行口座が必要です。口座を開くには滞在許可証が条件です。で、振出しに戻る。

加えて、東京のベルギー領事館で労働許可証について聞かれたとき、いりませんと言ったのが大まちがいでした。労働不許可と記載された労働許可証が必要だったのです。

UCLの副学長に手続きの無理を通していただき、福大の事務に書類を依頼し、錬金術を施して循環を脱しました。これは夏休みだからで

きたことです。町が学生で溢れる時期には無理です。複雑な手続きには免疫ができて、という自信がぐらつきました。

住居には警察が来て、居住の事実を確認します。留学生たちに「これはやっかい」と脅されたのに、あっさり済みました。近所の人たちが親切で、家賃は高くても良い選択でした。湖のほとりで、週末には熱気球や超軽飛行機が釣り人のかすめて通ります。天気が良いと馬や、羊ほどの特大犬が人を散歩させるのが見えます。家の設備は暖房が充実していて、水回りが弱いのです。家具は自分で組立てました。

車はパリで借りました。買うと売るのがめんどろ。旅行者用の赤ナンバーなので、どじな運転も許してもらえます。どろぼうには目をつけられやすいそうですけど。

滞 在

受け入れ先は経営管理研究所で、多くの先生がCOREと兼任です。所長が「別に執務室があるから」と、研究室を貸してくれました。

1年しかないので、時間を大切にしました。着いてすぐサプライ・チェーン・マネジメントの夏期コースに便乗です。受講者がヨーロッパ中のいろんな国から来ているので、主に英語です。企業をたくさん見学できたのが収穫でした。講義は契約の数理が新鮮でした。

COREでは隔週くらいに研究会があり、最先端の話が聞けます。英語です。最も印象深かったのは「人間行動の算法的な解釈」でした。「行動の理論は歴史的にこう発展して来た。その流れの中で自分はこういう考えに至った」という話の運び方に、ヨーロッパを感じました。

大学院の整数計画法を聴講しました。講義がフランス語、教科書は英語。平行してフランス語の授業も受けたので、質問できるようになりました。

ベルギーのオペレーションズ・リサーチ学会

は自国語でなく英語です。建国にあたって自国でなくドイツから王家を迎えた状況と似てます。おかげで発表が楽でした。

ドイツでForthという計算機言語の学会があり、有名なプログラマたちに合えました。僅か3日間の合宿なのに、目に見えて腕が上がったのが不思議です。

オランダ、ドイツ、フランスにはさまざまな用事で何度も行きました。イギリスは打合せで3回。ルクセンブルグ、スイス、スペインが1回ずつです。

ヨーロッパでのお勧めは、日本にはない内陸運河の旅です。チャンネル・デュ・ミディあたりで暖かいとき1週間くらい船を借り、自分で動かします。免許はいりません。

UCLは期待どおりでした。良さの鍵は人です。ただしフランス語が主目的なら、フランスの大学に行った方が良さそうです。ベルギーは多言語環境ですから。いたるところ複雑な事情だらけで、ベルギーは底なしの奥深さです。

帰 国

研究所でお別れ会を開いてくれました。世界中から来ている研究員や院生など、若い友人ができたので、帰り支度は楽でした。近所の人たちも手続きを手伝ってくれたり、空港まで車で送ってくれたり。

たくさんの方々のおかげで希望が実現しました。直接はお返しできなくても、自分が嬉しかったことは、なるべく人にもしてあげたいです。手始めに自分の学生から。

チュービンゲン・研究滞在記

法学部助教授 森 永 淑 子

2004年8月より1年間、本学の長期在外研究員として、ドイツ・チュービンゲン大学法学部に研究留学する機会に恵まれた。同大学のシュレーダー教授と本学法学部の野田龍一教授が以前から懇意にされていたこと、さらに私の在外研究準備中、本学法学部の生田敏康助教授が同大学に留学されていたこともあり、事前の手續や情報収集が当初からスムーズに進んだことは非常に幸運であった。

街・チュービンゲン

ドイツ南西部に位置するバーデン・ヴュルテンベルク州の州都シュトゥットガルトから電車で1時間ほどのところに、チュービンゲンは位置する。街中を流れるネッカー川と、その傍らにある古都の面影を色濃く残す旧市街の家並みは、この街を代表する景色といえるだろう。ドイツ滞在中に訪れたさる博物館の展示で、17世紀のチュービンゲンの街並みを描いた風景画を目にしたが、現在の街の姿とほとんど変わらないのは驚きであった。それというのもチュービンゲンは戦災にほとんど遭っていないからであり、それゆえ大学にも古くからの貴重な資料が数多く残っていると聞く。

チュービンゲン全体の人口は現在9万人弱であるが、この約1/4がチュービンゲン大学の学生であり、職員などの大学関係者も多い。大学街たるゆえんである。その点でもこの街と切っても切り離せないチュービンゲン大学は、1477年に設立された伝統ある大学である。歴史

的建造物とっていい校舎等を大切に維持しつつも、その中では最新の知見や技術にも取り組んでおり、学問・研究の場としての落ち着きと活気が絶妙なバランスを保っているという印象であった。ここの医学部の研究水準は高く、また神学部もドイツ国内で神学研究の場として名高い。このような小さな古い街でトップレベルの研究が行われているというのも、歴史と伝統のなせる技というべきだろうか。

住まいと生活

チュービンゲンの小さな駅でシュレーダー教授ご夫妻に温かく迎えられ、その足で案内された住居は、大学からバスで15分ほどの所にある外国人研究者用の宿舎であった。私が入った棟は昨年改装が済んだばかりということで、設備も調度も新しく、一人で1年間生活するには勿体ないほど広く快適な住まいであった。宿舎の裏手は畑と森林になっており、休日ともなれば、散歩好きのドイツ人らしき人々が、夏冬問わずそぞろ歩きを楽しんでいた。私も郷に入れば郷に従えとばかりに度々散歩したが、その際、東洋文化に関心があるという女性に話しかけられ、片言ながら日本の宗教や文化についてしばし語り合ったのもよい思い出である。

チュービンゲン大学での研究環境

大学では幸いシュレーダー教授の講座内の一室を単独で使用させていただくことができ、そこで資料検索・収集と調査研究にあたるのが私

の日課となった。

チュービンゲン大学の法学関係の図書は基本的に、大学本館であるノイエ・アウラ (Neue Aula) および道路を挟んだ向かいに位置する旧物理学部棟 (Alte Physik) 内にある所謂法学部図書室 (Juristisches Seminar) に配架されている。各図書室は、入口に係員がいるものの、研究目的での出入りは基本的に自由であり、身分証明書や図書館利用証がなくてもほとんどの資料にアクセス可能であった。昨今の日本の大学図書館で学外者の入室に手続不要というのは稀なことを考えると、このオープンさは刮目すべきものだろう。

同大学は新旧の資料に恵まれ、相互貸借や他施設への複写請求の制度も充実しているため、文献に関する障害にはほとんど出遭わなかった。ただ、言葉に不自由していた私を悩ませたのは、一部の資料はこの法学部図書室内にはなく、別の建物である大学の総合図書館にしか配置されていなかったり、マイクロフィルム化されたカタログを検索した上で、オンラインで閉架書庫から請求しなければならないといったことであった。かかるシステムは、一度知ってしまえば単純なことなのだが、その情報に辿り着くまでに時としてかなりの時間と労力を要する。周到にも総合図書館では、図書館主催の新入生・学外利用者用ガイドツアーが提供されているけれども、全てドイツ語のみで説明され、込み入った資料探索や手続はデスクに尋ねることになっているようである。ここにはやはり言葉の壁が立ちただかっていると言わざるを得ない。チュービンゲンに限らず一般論として、外部の人間・特に外国人に図書館利用の全体像を把握させる適切なガイドの必要性を改めて感じた次第である。幸い私の場合は、時折躓きながらも、講座の助手の方などに質問・相談しながら、調査研究を進めていくことができた。

リヒテンシュタインでのコロキウム参加

私がお世話になったシュレーダー教授は、ちょうど私の滞在期間中、いわゆる研究休暇をとられていた。講義・ゼミを持たずに研究活動や博士論文準備中の学生指導などに専念されていたが、あるとき、リヒテンシュタイン国内のリヒテンシュタイン研究所 (Liechtenstein-Institut) で開催される、法の継受に関するコロキウムに参加しないかと私を誘われた (法の継受とは、ある国が他国で既に存在する法・法制度を取り入れることを指すが、日本の民法がフランス民法・ドイツ民法の影響を強く受けていることは広く知られている)。教授はそのコロキウムで報告を担当されていたが、当該テーマには日本とドイツの民法を研究する私も関心があるだろうということで、声をかけられたのであった。コロキウムにはドイツのみならずイタリア・オーストリアの研究者も参加し、諸国の法の継受に関して興味深い報告と質疑応答が続いた。小規模ながらもこのように国際的な研究交流を持てる環境とバックグラウンドに、些かの驚きと憧憬をも感じたひとときであった。

日常生活の中では苦勞と困難もあったものの、上記のように全体としては充実し恵まれた在外研究生活を送ることができた。このような機会を与えてくれた福岡大学と、ご助力いただいた皆様改めて感謝しつつ、この小稿を閉じることとしたい。